

私たちはどのように作品を解釈しているのか? (〈批評理論〉に関する問い)

担当：石井 拓洋  
takuyo.ishii (a) gmail.com

作品の意味は「読者」側によって作られているのではないか?  
「読者」はその時、「作者」像すら作り上げて解釈しているのではないか?

問1 この詩をどのように解釈しますか? どのような世界が見えてきますか?

寒さかな  
斧<sup>おの</sup>こだまする  
古寺に

この詩の作者はコンピュータ。つまり、プログラムが、たまたま生成した文字列。このような背景を知る前後で、多少でも、詩の解釈や印象が変化するのはなぜだろうか? その変化が示唆するのは、「読者」は、「テキスト」(作品)解釈の時、自らのうちに、ある「作者」像を想定することで、解釈の正当性を得ている、ということではないだろうか?

参考：黒崎政男『哲学者はアンドロイドの夢を見たか』p.121.

問2 「12」の次にあらわれる数字はなに? その理由は?

2 → 4 → 6 → 8 → 10 → 12 → ?

いかなる数字も考えられる。ここで「14」と回答する人は、自らのうちに、「2ずつ加算する」という意図をもった、〈統一性を指向する作者〉の存在を無意に想定している。一方、もし、かかる作者を想定しなければ、つまり、純粋に「テキスト」のみで解釈するならば、どのような数字でも考えられることになる。したがって、「テキスト」(作品)解釈は「読者」のうちに、統一性を志向する「作者」の存在を想定しなければ解釈できないとも考えられる。

参考：竹田青嗣『言語的思考へ：脱構築と現象学』p.246.

問3 正しいのはどれ? その理由は?

$$68 + 57 = 125$$

$$68 + 57 = 5$$

いずれも正しいと考えることも可能。理由は問2と同じ。上のみを正解とするのは、「+」(プラス)という概念を正確に使用せねば、気がすまないような、架空の「作者」の存在を「読者」が無意に想定するから。一方、たとえば、「+」の記号を「クワス」と読む異星人がいたとして、彼らにとってこの記号は「ある数に加算する数が57を超えると、答えはつねに5である」という概念であったならば、その場合は、下の式もまた、正しいことになる。すくなくとも、この問いだけでは、つまり、「テキストのみ」(作品のみ)からでは、「クワス」の可能性を否定できない。いずれにしても、「テキスト」(作品)解釈には、「読者」は「作者」を無意に想定している。(「クワス」とはクリプキが勝手に作った想像上の記号)。

参考：ソール・クリプキ『ワイトゲンシュタインシュタインのパラドックス：規則・私的言語・他人の心』